

## 中部の「里山資本主義」

11月8日16時から名市大滝子キャンパス・人文社会学部棟201教室において、ESD公開シンポジウムが開かれた。このシンポジウムは、名古屋国際会議場で開催されるESDユネスコ世界会議(10~13日)の「プレ企画」として行われた。201教室はわたしの「最終講義」の会場であり、8ヵ月余り前を懐かしく思い出しながら、パネリストの報告をじっくり聴いた。

シンポジウムのテーマは、藻谷浩介・NHK広島取材班『里山資本主義—日本経済は「安心の原理」で動く』2013年による。この本を読んだとき、「世界経済の最先端、中国山地」「21世紀先進国はオーストリア」などに関心をもった。その中部版の実践記録、事例報告が行われ、会場一杯の参加者も真剣に耳を傾け、興味深い写真をじっと眺めていた。わたしも愛用のiPadで何枚も写真を撮った。今書いているレポートも、これを活用している。

3人のパネリストと報告タイトルは次のとおりである。写真にある中津川市加子母総合事務所の田口幸子さんの「加子母の里山資源—『域学連携』による地域づくり」、NPO法人地域再生機構理事の森大頭さんの



の「地域と森を元気にする『木の駅プロジェクト』」、名古屋大学大学院環境学研究科教授の高野雅夫さんの「若い世代が担う里山と山村地域の再生」である。事例報告の地域が中津川・大垣・豊田であり、いずれも大規模な市町村合併したところであり、わたしにとって馴染みのある地域であり、親近感をもって報告を聴くことができた。

報告のなかでとりわけ面白かったのが、最初の田口幸子さんの報告である。加子母は中津川のいちばん北のほうに位置して、温泉で有名な下呂市に近い。まちの94%が森林の山間地域であり、人口は3060人である。加子母は「伊勢神宮式年遷宮御神木の里」であり、名古屋城本丸御殿の修復などで名古屋市との関係も深い。報告の副題の「域学連携」の話は示唆に富むものであった。20年ほど前から多くの大学との連携が持続しており、田口さんは「域学連携」担当である。

里山資源を活用した多彩な取り組みが、美しい写真により詳細に報告されたが、最後の方にあった「加子母る大学」に注目した。加子母全体が学びの場、住民は先生という。地域では「地域問題解決への提案・実施」など、大学は「持続的な山村文化での学び、技術の習得、豊かな知恵の習得、地域づくりの学び」をめざす。10月31日にレポートしたWOOD JOB!のように、確実に若い人たちが山村に目を向け始めているようだ。

(2014年11月10日)